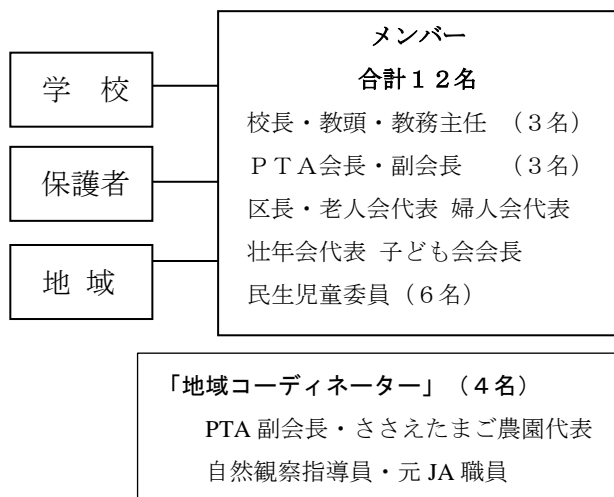


## 令和元年度 福井型コミュニティ・スクール 実施報告書

敦賀市立査見小学校

### 1 「家庭・地域・学校協議会」の運営について

#### (1) 「家庭・地域・学校協議会」の構成



#### (2) 協議会の内容

- 開催回数(予定) 年間3回程度
- 開催日程・主な協議内容(予定)
  - ①第1回: 7月11日(木)
    - ・スクールプランと学校経営方針
    - ・学校、児童に関する情報交換
  - ②第2回: 10月29日(火)
    - ・1学期学校評価の結果と考察
    - ・2学期の学校運営や児童についての提言
  - ③第3回: 2月28日(金)
    - ・2学期学校評価の結果と次年度への提言
    - ・次年度の学校行事の計画
    - ・地域の人材活用について
    - ・情報交換

#### (3) 協議会における成果と課題

年3回の協議会で、学校の各取組の目的や成果、課題等を丁寧に情報共有し、保護者や地域の理解を得る機会にすることができた。例を挙げると、児童からの声で実施したクリーン作戦の看板制作や学校周辺の環境整美にPTA会長や副区長がボランティアで協力してくれたり、校下体育大会の課題を各々の立場から振り返り、意見交流したりすることができた。

### 2 地域と進める体験活動

#### (1) 活動のねらい

本校は、地域と結びつきが強い環境の中であり、様々な地域の行事に積極的に参加することで、地域の方々と関わりを持ってきた。しかし、これまでの取組を振り返ると、周囲の大人が準備した企画・行事等に参加するといった受身的な活動が多かった。

そこで今年度から、地域に息づく伝統や産業を見直し、児童が自ら考え企画し、運営していく活動を地域の方々と一緒に取り組む活動を実施していくことにした。この活動をおして、「地域の良さを再発見し、地域に誇りを持ち、進んで地域のために考え行動できる児童を育てる」というねらいを達成していこうと考えた。

#### (2) 活動の実際

##### ① 「商品開発の道のり」(6年生)

昨年度活動していたこともあり、3月頃から、何を持って地域をPRするのか、PR方法について考えた。昨年と同様、地域の「ささえたまご農園」経営者の佐々江良一氏に協力依頼をし、「米粉」を使ったお菓子を製作することにした。

それと同時に、【HAPPY COMPANY くつみ】での活動を、昨年から引き続き行うことにした。

(様式3)

4・5・6月と、試作を重ねた。まず、最終目標である、修学旅行に持って行くことが可能なお菓子であることを条件に、どのお菓子がよいか試作を行った。そこで、昨年と同じ品物を売るのではなく、自分たち独自のものが販売できないか、敦賀をPRするための仕掛けが何かないかと考え、敦賀昆布館で販売されている「昆布ソフトクリーム」から「昆布味の米粉パウンドケーキ」を製作しようと決定した。



まずは、4月23日に佐々江氏に来校いただき、商品の作り方から市場での販売方法に至るまでの経路など、開発に必要となる様々な専門的知識を教えていただいた。子どもたちは、「なぜ生地がパサパサになるのか。」など、試作での失敗の原因や改良点を積極的に質問し、商品開発の現場の声に触れることで具体的な目標が見えた。



また、昆布館へ校外学習に行き、「なぜ敦賀で昆布が有名なのか。」

「昆布をお菓子に使用するとするとどの割合で入れるのがよいか。」など、自分たちで質問しながらPRの方法を探った。

## ② 「伝統をつなぐ」(5・6年生)

1月29日に、次年度への引き継ぎとして、現5年生に向け、自分たちが取り組んできたPR活動について発表した。どうすれば1年間の活動が5年生に分かりやすく伝わるかを考え、年末からスライドや原稿を作った。「自分たちの築き上げてきた活動が今後も続いてほしい。さらにパワーアップした【HAPPY COMPANY くつみ】を作り上げてほしい。」という思いを率直に伝えた。5年生からも、「自分たちの代でもしっかりとPRできるようがんばりたい。」という声上がり、下級生のやる気を引き出す実りある発表会にすることができた。

## (3) 地域コーディネーターの活動概要

ささえたまご農園代表には、6年生のパウンドケーキ商品開発・制作活動において、事前指導と商品作りの支援をいただいた。全行程を子どもたち自身が主体的に進めていくため、プロとしての専門的な知識や技術指導の協力が実践の質の向上につながった。また、各活動に対する評価や次年度への協力内容も示していただいた。

## (4) 特に工夫した事項

本年度は、特に児童主体の活動を重視した。前年度の【HAPPY COMPANY くつみ】の活動を見てきたことによって、6年生が「自分たちも挑戦したい」という意欲や「同じことでなく、オリジナリティも出したい」という独自性の高まりが生まれていた。そこで、教員の役割としては、子どもたちの気持ちを受け、挑戦の機会や場の設定を工夫することとした。一からの商品開発やロボットとのコラボ、会社運営の引き継ぎ等、社会性に富んだ体験ができた。

## (5) 成果と課題

6年生の活動を内外に発信したことにより、子どもの意欲を引き出し、活動のイメージを持ってスタートを切ることができた。また、子どもからのアイデアの出し合いや試作の時間をしっかりと、子ども自身が悩んだり失敗したりする経験を重ねさせた。このことが、子どもの主体性を高め、活動後の達成感につながった。5年生へ活動報告をすることで、次年度へ活動の本質が継承されると思う。

課題としては、子どもの思い描いた取組を、担任を中心とする教職員がどのように支援していくか、共通理解していくか。学校全体で確認し、活動の内容や方向性を決定していきたい。